

成城学園初等学校の文集『柏』について： 「大東亜戦争」の一つの記録

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊木, 哲 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1307 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



成城学園初等学校の文集『柏』について

——「大東亜戦争」の一つの記録——

熊 木 哲

表題を「柏」とし、「紀元二六〇二年」と副題を持った文集がある。背表紙にも「柏」とのみある文集であるが、発行所名は、表紙にも背表紙にも記載が無い。

中表紙には、「柏」の下に、横組みで「紀元二六〇二年」とあり、その下に柏の葉の表と裏をかたどったイラストがあるが、発行年月日、発行所等を記載した奥付はなく、定価の表記も無い。

大きさは、縦182ミリメートル、横127ミリメートル。全一九一ページ。印字は、活版ではなく孔版印刷。字体からは一人によるものと推測されるが、孔版印刷を製本した非売品の文集ということになる。

中表紙の後には、二ページの「まへがき」があり、その後、四ページ分の「目次」がある。

一 文集『柏』の性格

この文集の性格は、「まへがき」によって知ることが出来るので、全文を引用してみる。

成城学園初等学校の文集『柏』について

まへがき

全員合作

一昨日の雪がまだ残つてゐる。北向の屋根は真白だ。今日も小雨がシト／＼と降つてゐる。早く雪がとければいゝね。雪がとけたら、もう暖かになるだらう。梅の花が咲く。春が来る。

春休みまで後十三日だ。僕は五年生になる。

今年は雪がたくさん降つた。

『シンガポール陥落の日』も雪で真白だつた。僕は雪をふんで祝賀行進をした。シンガポールは昭南島と名をかけた。日本の兵隊は強いから、次々にいろ／＼の所を占領していく。

お正月は兵隊さんの事を考へて、ぜいたくをしなかつた。いつものやうにお餅が食べられなかつた。

クリスマスの日には香港が落ちた。

米英に宣戦布告したのは十二月八日だつた。僕は其の日学校で先生から戦果を聞いて喜んだ。ハワイの敵艦を多数撃沈した。先生からニュースを聞いた時、僕は「ワー」といつて飛びまはつた。

東條さんの力強い勇ましい言葉が全国に放送された。僕は勇み立つた。

小学校が国民学校になつたのは僕達が四年生になつた時だつた。僕の学校も「成城学園初等学校」と改めた。四年はほんとうに思ひ出の多い年だつた。いつまでも――忘れてはならない。この文集の中にも非常時の姿がいっぱいあふれてゐる。

この文集は大東亜戦争の始まつた頃の記録としていつまでも――大切に置いてほしい。

昭和十七年二月二十七日

|| 四年の終りが近づいた綴方の時間に ||

右の「まへがき」に明らかかなように、この文集は、「成城学園初等学校」四年生の「綴方」作品を収録したものである。

また、文集の名称『柏』は、昭和十六年度第四学年の学級名称によるものと推測する。『成城学園五十年』（昭和四十二年十月十日発行）によれば、昭和五年度の第四学年は、「椎組」「柏組」「蕁組」であり、戦後直後の昭和二十年十月の第一学年の名称は「柏」「松」「楠」であった。

つまり、『柏』は、学級名称と推測する所以である。

なお、ここには「成城学園初等学校」とあるが、『成城学園六十年』（昭和五十二年十月二十日発行）の「第二次世界大戦中の学園」の項では、「成城小学校」の名称は、「尋常小学校」の「国民学校」への転換に合せて、昭和十六年四月から「成城初等学校」と改称したことが記されているが、本稿では、「まへがき」に記述された「成城学園初等学校」と記すこととする。

『シンガポール陥落の日』は、昭和十七年（一九四二）二月十五日。この日、山下奉文司令官が英軍総司令官パーシバル中将と会談、降伏を確認し、同十七日に大本営は、シンガポール島を昭南島に改称することを発表した。

「僕達は雪をふんで祝賀行進をした」とあるが、シンガポール占領を祝っての「戦捷第一次祝賀式」は、二月十八日に全国で開催され、日比谷公園では、大政翼賛会などの主催で祝賀国民大会が開かれ、東條首相をはじめ十万人が参加した（『昭和二万日の全記録』第六巻、講談社、平成二・一）。

しかし、二月十八日は、東京地方は終日晴れ。雪は降っていなかった。『昭和』（前出）によれば、東京で雪が降ったのは、二月十五日午前中。気温は氷点下一度。ただし、午後三時には曇りであり、雪は上がっていた。

従って、「成城学園初等学校」四年生が、「雪を踏んで祝賀行進をした」のは、十五日ということになり、当日の十五日に『シンガポール陥落』が伝えられ、早速、祝賀行進が行なわれたということになる。発表から祝賀行進までの時間を推測すれば、その祝賀行進は、学園での校庭かあるいは、学園周辺でのものであったということか。

「クリスマスの日に香港が落ちた」とあるが、香港島の英国軍が降伏し、占領したのは、昭和十六年十二月二十五日で

あり、「米英に宣戦布告したのは十二月八日だった」。

十二月八日午前七時、ラジオは、臨時ニュースで対米英開戦を報道し、国民は、開戦を知らされた。「東條さんの力強い勇ましい言葉が全国に放送された。僕達は勇み立った」とあるが、ラジオは、同日午後十二時に、宣戦の詔書と東條首相の「大詔を拝し奉りて」を放送した。

只今宣戦の御詔勅が渙発せられました。精鋭なる帝国陸海軍は今や決死の戦を行ひつゝあります。私達は光輝ある祖国の歴史を汚さないと共に、更に栄えある帝国の建設をめざして、今こそ一死報国の決意を固めて、この大國難を突破せねばなりません。

「少國民新聞」昭和十六年十二月九日第一面に掲載された、「大詔を拝し奉りて」の「大要」である「詔勅を拝して 首相國民に決心を促す」の前半である。放送があった八日は月曜日であり、児童は、学校でこの放送を聞いたということになる。学校は、児童に聞かせたということである。

「わが陸海軍、米英と開戦」の号外の響きに明けた八日朝、帝都の空は、皇軍の首途を祝ふやうに、くつきりと晴渡りました。午前九時、この日の朝訓話は、文部次官菊池豊三郎先生です。宮城間近の京橋区泰明校は、全校の皆さんが、拡声器から洩れる一語も聞逃すまじと、全身を耳にして聞きました。

「少國民の皆さんは、寒さに負けずにつかりやつて下さい。日本は、いよくアメリカと戦ひを始めました。うんとがんばりませう。」という力強い菊池先生のお言葉……

「さうだ。寒さが何だ。日本は建國以来の大國難にぶつかつたのだ。やらう。」という健気な覚悟は、全校生の輝く

眼に、きつと結んだ口元に、堅く握りしめた拳に強く現れました。お話が終ると久保田校長先生を部隊長に、全員で二重橋前に行進して、忠誠の真心をこめた万歳をのども裂けよと高唱しました。

前掲記事と同じ「少國民新聞」の第一面に、皇居に向かって深々とお辞儀をしている少年少女の写真とともに掲載されたものである。「宮城間近の京橋区泰明校」ゆえに、いわば動員されたものと推測されるが、成城学園初等学校を始め、国民学校や私立校にも、開戦当日、開戦と戦果を、ラジオによって児童に伝達する設定が事前に企てられていたということであろう。

「はじめに」は、「昭和十七年二月二十七日」四年の終りが近づいた綴方の時間に「」の一行で結ばれるが、この一文の内容は、必ずしも、明確ではない。収録された作品が、この時間で綴られたということではなく、この日以前に作品は出来上がり、当日、いわば最終稿として孔版印刷に出すことになったのがこの日であり、この日、二月二十七日の「綴方の時間」に、「はじめに」の一文が「全員合作」で出来上がったということであろう。

何れにせよ、この文集の性格としては、「はじめに」の内容に盛り込まれた時局から明らかのように、成城学園初等学校第四学年「柏組」による「大東亜戦争の始まった頃の記録」ということになる。

二 文集『柏』収録作品

文集『柏』に収録されたのは、次の三四作品。作者名をイニシアルとし、性別を付記する。()内の数字は、開始ページ。

お父さんがんばれ

お父さんがんばれ …… K・M 男子(一)

いとこの出征 …… U・N 女子(四)

負傷した兵隊さん …… O・A 男子(一〇)

兵隊さんさよなら …… S・E 女子(一四)

兵隊さん …… Y・Y 男子(一八)

小父さんの出征 …… W・H 男子(二三)

レキシントン …… M・I 男子(二九)

足あぶり …… K・T 男子(三三)

中村屋のパン …… M・K 女子(三五)

燈火管制 …… D・H 男子(三九)

お父さんの自転車 …… T・S 女子(四四)

葉ビン

葉ビン …… N・N 男子(四九)

かさをお父さんへ …… H・A 男子(五七)

お父さんの長靴 …… K・R 女子(六四)

おべんたう …… S・T 男子(六九)

ねこすて …… N・K 男子(七五)

草刈 …… S・M 女子(八二)

真

真 …………… W・M 男子（八七）

家の小犬 …………… K・M 女子（九二）

甲 …………… K・H 男子（九七）

マコ …………… N・Y 女子（一〇四）

小鳥 …………… H・M 男子（一〇八）

尚子の病氣

尚子の病氣 …………… K・K 男子（一一五）

風ひき …………… K・K 男子（一二一）

はげ

はげ …………… Y・I 男子（一二七）

坊主がり …………… S・A 男子（一三七）

落した財布 …………… O・Y 男子（一四二）

僕のポケット …………… N・S 男子（一四八）

雪タマ山

雪タマ山 …………… Y・Y 男子（一五三）

マラソン …………… W・T 男子（一五八）

操ちやん …………… T・I 女子（一六四）

相撲 …………… T・Y 男子（一六八）

成城学園初等学校の文集『栢』について

大山登山 …………… K・K 女子（一七三）
 花月園 …………… T・M 男子（一七九）

「綴方の時間」に作られたということであるから、クラス全員の作品が掲載されたということであろうが、男子二四名、女子一〇名で、三四人学級ということになる。

部立てはないが、「お父さんがんばれ」をはじめ、それぞれ始めの作品名を題目とする六部から成り、色紙に題目を記した間紙を入れ、区分している。

また、開始ページからも分かるが、作品の分量には、はっきりした制限はなかったようで、各自にまかされていたという事であろうか。

以下、適宜、作品を引用するが、促音「っ」の表記は、作品によって、「つ」であったり「っ」であったりするので、その作品の表記によることとする。また、本稿での引用は、旧字体は新字体に改めた。

三 戦時下を背景とする作品

戦時下を内容とする作品は、「お父さんがんばれ」の部に集められている。

この部立てに入れられている作品一一作品のうち、戦時下を内容とするものは、「お父様の自転車」を除く、一〇作品。

「お父さんがんばれ」（K・M）は、「大東亜戦争のはじまつた十二月八日を、僕は忘れることは出来ない。」とはじまる。その理由は、「僕のお父さんは、ハワイの総領事でホノルルに居る」からだ。心配でならないでいると、「おばあちゃん」

が「だからあしたから毎朝明神さんへおまゐりにいこう」という。翌日、九日の朝から「兵隊さんの武運長久とお父さんが丈夫であるやうに」とお参りに行き、それから毎日く、お参りをしている、という作品。作品には「お母さん」は登場しないが、「お父さん」と一緒にハワイにいるということであろうか。ラジオは、ハワイでの「戦果」を繰り返して放送している。そのハワイにいる「お父さん」の安否は、言うまでも無く心配だ。「お父さんはどうしてゐるかな、昨日はあんなにばくげきしたのに大丈夫かしら」と気が気ではない。「戦果」が華々しいことは、「お父さん」の身に「ばくげきした」ことにもなるからだ。

「いとこの出征」(U・N)は、二十二歳のいとこが、宇都宮の連隊に入るために、お別れにやって来たというもの。

私は栄照さんの顔を見た。もう二三年、もしかするとあへないのだと思った。

今日は楽しいやうでも、悲しいやうでもあった。ごちそうがとてたくさんあった。ぶたとすき焼とお酒とビールもある。私はすき焼を二はいたべた。

入営に持っていく「日の丸」への寄せ書きをしたり、食事をしたというもので、「ごちそうがとてたくさん」あり、「ぶたとすき焼とお酒とビール」もあった。「甥」の入営に当たって、いわゆる「娑婆」とのお別れに、出来る限りの豊かな食事を用意した、児童の父親の心遣いであったか。とはいえ、このご時勢に、有る所には有るといふことか。父親はスプリング会社の社長であった。

「小父さんの出征」(W・H)は、題名のように、小父さんの出征。

明小父さんはお母さんの弟で、成城の尋常科の時、家が山梨県なので、家に泊つてゐた。成城を出て大学に入って、大学を出て、兵隊さんになつた。はじめから中尉だから、僕はうらやましかつた。

その小父さんは、「お正月にまた家に来て、九州のれんたいに帰つて行つた。いよく小父さんは戦地に行くつと、手紙でわかつた。」という。作品に登場する家族は、僕の「お父様」「お母様」「上のお姉ちゃん」とお手伝いの「ねえやさん」。

「負傷した兵隊さん」(O・A)、「兵隊さん」(Y・Y)は、共に、祖師谷大蔵から乗つた電車に、傷兵が乗つていたというもの。

「負傷した兵隊さん」では、「リンカーン物語」を読んでいた僕に、兵隊さんは、「学校でそんな本をよませるのかい」と話しかけてきた。作者の児童は、兵隊さんの言葉の中に、アメリカと戦争をしているのにとの意図を感じ取つたということか。

「兵隊さん」では、「白い着物を着た兵隊さんがぞろ／＼、ホームに入つて来た。見ると皆肩に赤十字をつけてゐた。普通の軍服を着た兵隊さんが一人先にたつてゐた」というもので、傷兵の外出と乗り合いになり、空いている座席の譲り合いが内容。

「兵隊さんさよなら」(S・E)は、次の一節ではじまる。

八月四日の夜、家に泊つてゐた兵隊さん四人が戦地にたつので夜おそくまであそんでゐました。夕方早く兵隊さん達は、お風呂に入つて、早く夕御飯を食べてしまひました。

夜中の十二時になると、兵隊さんは家を出た。集合場所には、「大ぜいの兵隊さん達」が集ってきた。近隣の家々に宿泊していたということである。

「レキシントン」(M・I)は、「ふとんを米国のレキシントンにして」枕を投げて遊んでいて、布団を片付ける邪魔をしたと、「ママ」に叱られたというもの。「悪いことをするやつには朝御飯を食はしてやらんでもいゝ」と「パパ」にも叱られた。「レキシントン」は、アメリカ海軍の航空母艦。その「レキシントン」を、枕爆弾で撃沈する遊びだったが、当の「レキシントン」が珊瑚海海戦で沈没するのは、文集発行日の二月二十七日から七十日後の一九四二年(昭和十七年)五月八日。勿論、児童が知る由もないが、「レキシントン」は、児童にとって撃沈すべき航空母艦として認知されていたということである。

「足あぶり」(K・T)は、「金属回収」に、湯たんぽと針金と僕の「足あぶり」と妹のスケートに鳥かごを出した。「防護団の人がリヤカーにいつぱい門や鉄のおなべなどをつんで」行くのを見送った。「僕の足あぶりが鉄砲のたまになつて敵の陣地へとんでいくやうになれば嬉しいと思つた」。

「金属類回収令」は、昭和十六年(一九四一)八月三十日に公布され、九月一日に施行。随時、実施され、兵器製作の継続のために、家庭における不要な鍋釜をはじめ、鉄製の門扉なども回収されていたことである。寺院の仏具や梵鐘などにも強制譲渡令が発動され、回収されるのは、文集『柏』から二カ月後の昭和十七年五月であった。

「燈火管制」(D・H)は、雨戸の無いガラスに、黒い紙を貼るといふもの。玄関の窓にも台所の入口にも貼った。

開戦第一日の八日夜から、全国では敵機襲来に備へて空の護りを嚴重に固めました。九日朝まで遂に敵機は一台も姿を見せず、午前七時、管制は解除されました。しかし敵機がわが国土を狙ふことは明らかであります。管制のあつたなしに拘らず、協力一致して防空に務めませう。

「少國民新聞」昭和十六年十二月十日第二面に掲載された「偉いな・管制解除」の記事である。空襲を想定して、各家庭では、夜間、灯りが外に洩れないよう求められた。

「中村屋のパン」(M・K)は、日曜日の午後から「中村屋」がパンを売出すので兄弟三人で並んで買ったというもの。「中村屋の前はもうパンを買ふ人でいっぱいだった。私達の来た時の倍ぐらい大ぜいになって、長く列をつくつてゐた」。生産と消費とのアンバランスが戦時下の状況と捉え、この作品も戦時下を作品背景とするものとした。

以上の作品には、戦時下ゆえの児童の生活環境が背景にある。

このほかに、作品中に、戦時下ゆえの用語が現れる作品が二つ。

一つは、飼い犬を内容とする「甲」(K・H、「真」の部)。犬の甲は「大東亜戦争のあることも知らない甲はいつも御飯をやればきげんがよい」の一節がある。

もう一つは、髪の毛を三分刈りにした内容の「坊主刈り」(S・A、「はげ」の部)。坊主刈りにした翌日、学校へ行くとき級友が、「出せい兵士みたいだね」という。この学園では、坊主刈りは、「兵士」につながるということだった。

四 日常生活を背景とする作品

「お父様の自転車」(T・S)は、将に「お父さんがんばれ」の部に入る作品。「お父様」が、補助車のついた自転車を買って来て練習を始めた。乗れるまでにひと月もかかったという内容。自転車の普及状態からは、大人が補助輪のついた自転車で練習することも珍しいことではなかったか。

「薬ビン」(N・N)は、児童が自転車に乗る内容。姉の薬を薬局に取りに行くために、自転車で出掛け、帰りがけに自転車に乗ろうとして、ビンに入った水薬を落して割ってしまったというもの。

「かさをお父さんへ」(H・A)は、成城学園初等科の先生である「お父さん」に、雪が降り出したので傘を届けるといふもの。届けたものの、「お父さん」は、雪まみれになって帰ってきた。

「お父さんの長靴」(K・R)も、雪が内容。雪の降った翌日、会社に行くお父さんが駅まで長靴で行きたいというので、学校が休みだから駅まで一緒に行き、帰りに長靴を持って帰るといふもの。「親孝行をしたのでうれしくてしかたがなかった」と作者。

「おべんたう」(S・T)は、兄が忘れた弁当をいやいやながら届ける話。途中の駅で、兄の友人に出会い、弁当を託した。

「ねこすて」(N・K)は、金魚を取って食べてしまった飼い猫を捨てに行く内容。かわいそうだが、仕方が無かった。「今でもねこの事を思ひ出す」と結ぶ。

「草刈」(S・M)は、日曜日に、「お父様」のお手伝いをして庭の草を刈ったというもの。

以上、「薬ビン」の部は、児童が、何らかのお手伝いをしたことが内容。

「真」(W・M)の「真」は、飼い犬の名前。寒くなってきたので、家の中に「真」を入れ、頭に布をかけると振り落としたり、身体を震わせたり捻ったりで面白かった。

「家の小犬」(K・M)は、家の犬が生んだで小犬可愛く、「学校から帰る時になると、早く帰って赤ちゃんにあひたいと思つて、きつと急ぎ足になるのです」というもの。

「甲」(K・H)は、迷い犬を飼い犬にした名前。学校へもついて来てしまふし、風揚げにも来たが、いつの間にかいなくなっていた。「甲」は先に帰っていた。「甲はすっかり僕と仲よしになつてしまった」が、「大東亜戦争のあることもなにも知らない甲は、いつも御飯をやればきげんがよい」。

「マコ」(N・Y)は、家の飼い犬のマルに生れた子犬の名前。貰われていったが、いたずらをしたり吠え続けたりするので、手を焼いた貰い主が返してきた。「お父様が朝二匹おさんぼにつれて行つてゐるんだけど、お父様はころんではかしまる」。

「小鳥」(H・M)は、家の中に舞い込んだ小鳥を、火鉢をひっくり返して畳をこがしたり、苦勞してつかまえた。よく見ると小鳥の口ばしが折れていた。

以上、「真」の部は、飼い犬と児童との心の交流が内容。

「尚子の病氣」(K・K)は、妹の尚子が病氣になったが、なかなか治らないので、おまじないをしたというもの。

「風ひき」(K・K)は、おじさんがひいた風邪が家族にうつって、妹にも「ねえや」にも、お母さんにも僕にもうつった。ひいていないのはお父さんだけになった。

以上、「尚子の病氣」の部は、二作品であるが、見出しのように家族の病氣が内容。

「はげ」(Y・I)は、頭の毛の一部がなくなつて、友達にもからかわれ、恥かしかつた。お父さんに、医者にいつて「太陽とう」を頭にかけるようにいわれ、行つてきた。塗り薬ももらった。でも、「ごはんの時お父さんとお母さんがいつも気にしてこつちを向いて、はげばかり見るのでいやになつてしまつた」と結ぶ。

「坊主がり」(S・A)は、髪の毛を三分刈りにしたが、お母さんも姉さんもからかい、同級生も「おはつう」とからかうかと思つと、気が重かつた。学校に行つて見ると、友達は「出せい兵士みたいだね」といい、「おはつう」とされるのだらうなと思つていたが、先生が「おはつうと言つてたゝくのは止めませう」といつてくれたので「安心した」。

「落した財布」(O・Y)は、遠足に行つた途中で財布を落してしまい、帰りの切符は先生が出してくれたが、お土産が買えなくて残念だつたというもの。

「僕のポケット」(N・S)は、机の上に自分のポケットの中のものを出して、何が入つていたかを話すことになつた。僕のポケットには、「ハンケチ」「ちり紙」「ひも」「あめのかみ」「写真めん」「上着のぼたん」「手帳二冊」「身分証明書」が入つていた。先生が、「いらぬものはなるべくもつて来ないやうに注意をして下さい」と言つた。

以上、「はげ」の部は、学校生活が内容。

「雪ダマ山」(Y・Y)は、雪が降つたので、雪合戦をしたり、雪だるまを作つた。雪だるまを転がす時「つっぱりの練習だ」といつたら、「雪ダマ山」との取り組みだと友達がはやつた。

「マラソン」(W・T)は、体操の時間に、先生がどんだん学校の外に走り出て、やがて止まると「ここから学校の砂場まで駆けて行つて、早い順に並んでゐなさい」といつた。「僕はヒリからかぞへた方が早かつた」。

「操ちゃん」(T・I)は、赤ちゃんの「操ちゃん」が、それまで笑つていたあやしにも笑わなくなつて、成長を示してきたというもの。そんな「操ちゃんがかはいくてたまりません」。

「相撲」(T・Y)は、「この前の日曜日には僕はママと兄さんと弟としんるいの人ですまふを見に行った」に始まる。「ババも行くはずだったが、用事があったから」来なかったという。千秋楽で、結びは、双葉山と男女の川で、「双葉山はもうれつによつた。それを男女の川がよけてゐたらとう／＼よけきれなくなつて土俵の下に滑り落ちてしまつた。そうしてより倒して双葉山の勝だつた」。取り組みを詳しく記し、轟負力士もいるという相撲通だ。取り組みからは、昭和十七年の春場所で一、二十五日が千秋楽。双葉山が優勝し、敗れた男女の川は、その一番を最期に引退となつた。

「大山登山」(K・K)は、いとこ達が来たので、「お父様」が大山に連れて行つてくれた。階段を登り、ケーブルカーに乗つて登山した。帰つてくると「あまりつかれてゐたのでいそいでねた」。

「花月園」(T・M)は、十月十一日に花月園に行つたことが内容。花月園からの帰り、蒲田で行列があつたので聞くと、ビスケットを買ふ行列だつた。袋にはキャラメルとビスケットが入つていた。

以上、「雪ダマ山」の部は、雪遊びにマラソンにと身体を動かす鍛錬だ。相撲見物、大山登山と花月園は、休日のレクレーションだ。戦時下であっても、楽しいことはあつたということである。

五 結び

この文集は、「大東亜戦争の始まつた頃の記録」として編まれたわけであり、「大東亜戦争の始まつた頃」の内容が予想されるところであるが、作品題名から、明らかに戦時下に思い至る作品名は、七作品にすぎない。内容からも、戦時下で内容とするものは一〇作品であり、「大東亜戦争」という用語をもつ作品を合せても一二作品であつた。三四作品中一二作品であり、約三五パーセントになる。

「大東亜戦争」の開戦から約三ヶ月後の刊行という時期から見たとき、戦時下の様相が、収録作品の三五パーセントに

現れていることが多いか、少ないかということは、この作品集の意図を測ることもなる。

児童と戦時下、つまり児童と軍人・軍隊との関係、児童の父や兄が軍隊にいかどうかといえば、軍人として登場するのは、「小父さん」と「いとこ」の二人だけであり、ただ一つ、「総領事」として父がハワイにいるという作品のみが、児童と直接関係のある戦時下であった。

一クラス三四名の児童の作品すべてに家族が描かれたわけではないが、家族が登場する作品には、父親や兄に、軍人は一人もいない。単に、父や兄が召集から外れていた年齢であったということであろうか。

内容からは、「大東亜戦争」の表現が見られるのは、二作品（「お父さんがんばれ」「甲」）であり、神社を参拝し「武運長久」を祈願するのは一作品（「お父さんがんばれ」）にすぎない。

「天皇陛下のために忠義をつくす事」との一節が「いとこの出征」にみられるが、この表現は、「いとこ」の出征へのはなむけの言葉であり、作者の兄であり、出征する「いとこ」の、年上の「いとこ」からの「楽しい食事をたべてゐる」時の言葉である。

作品中の時間は、昭和十六年の八月四日（「兵隊さんさよなら」）、十月十一日（「花月園」）十二月八日（「お父さんがんばれ」）、十七年の一月二十五日（「相撲」）であり、この点からも、統一的なテーマによる児童への指示の無かったことを推測させる。

つまり、開戦後三ヶ月という時間で編集された文集であるのにもかかわらず、戦時下色が濃くないといえる。

このことは、編集に際し、戦時下を内容とすることの指示がなかったということであり、内容については、児童にまかされたということであろう。

文集の性格を記述した「まへがき」の署名は、「全員合作」であり、児童による児童のための文集であることを示していた。奥付も無く、学級担任の明記もなく、発行所の記載も無いことが、この文集が、児童による児童のための文集であ

ることを示すこととなった。

文集『柏』は成城学園初等学校第四学年「柏組」の、家庭と学校の、「大東亜戦争の始まった頃の記録」であり、時局柄である「大東亜戦争」開戦への高揚感もなく、戦時下色の少ない、日常生活に取材した作品集ということが出来る。

(二〇一〇・一・一八)